



Movement Therapy in Hemiplegia

by Signe Brunnstrom

この本は Brunnstrom 法による片麻痺の評価、治療に関する集大成というべきものである。この本の原稿は 1968 年初めに完成し、コピーされた原稿を関係者に配布して、プロジェクトチームが組まれて、実際の患者に応用され、その結果や検討の期間が 2 年間設けられて最終的に出版されたのは 1970 年であった。内容は 5 章から成り、1) Motor Behavior of Adult with Hemiplegia, 2) Recovery stages and Evaluation Procedures, 3) Training Procedures, 4) Gait patterns in Hemiplegia, 5) Walking Preparation and Gait Training である。第 1 章では片麻痺の運動行動の中心に共同運動をおき、連合反応や種々の緊張性反射やその他把握反射等で運動行動の特色を説明している。第 2 章は、片麻痺に特色的である共同運動の発現やその消失の過程によって、回復段階を 6 つに分類している。上肢の肩・肘と手指、下肢体幹の 3 つについてそれぞれ 6 つの

段階に分類している。第 3 章では、Brunnstrom の治療法の原理とテクニックが多くの写真を使って詳細に説明されている。肩に疼痛のある場合の ROM 訓練のテクニック、上肢訓練における肩甲帯の運動の強調や、上腕 3 頭筋や手指伸筋の活性化や促進性について丁寧に述べている。第 4 章では歩行パターンについて、正常歩行と片麻痺における異常歩行の比較・分析を分かりやすく解説している。第 5 章の歩行訓練では、如何に歩行訓練に入る前の歩行準備が大事であるかを強調しており、片麻痺歩行の異常の多くはこの歩行準備訓練を充分にしていなかったことによって生じるとしている。PT はこの書を読むことによって共同運動に対する理解を深め、治療の考え方や方法を習得するうえに非常に参考になると思う。

(Harper, 192 ページ, 4,860 円, 1970)

(都養育院附属病院リハビリテーション部, 理学療法士

松村 秩)



右きき世界と左きき人間

マイケルバーズリー・著 西山浅次郎・訳

片麻痺など片側の上肢が補助手もしくは廃用手になった場合の訓練として、我々作業療法士は、しばしば「利き手交換」を行わなければならない場面に遭遇する。その場合の多くは右手から左手への交換である。そして利き手を左へ変えるということは患者自身へ大きな負担をかける結果となる。片手しか使えなくなる関係上、従来の利き手以上のレベルの巧緻性を要求されるし、そのための訓練は毎日繰り返しても 3 カ月以上を要する。文字を書けば鏡文字になりがち、何をやっても不器用、しかも世の中のものとは全て右利き用にできていて、左手用の道具はあっても数が少なくかつ値段が高い(例えば、右手用の工作鉋は 500 円で買えるのに、左手用となると 4,500 円もする)。もっとも東京では 4 つのデパートで最近左利きコーナーを設けたというが、行ってみると期待に反した状態である。こうした物質面ばかりでなく、左利きにするとどまりになると脅かされたり、子供の場合だと「左ぎっちょ」とからかわれたり——とにかく左利きは現実の世界では不利である。あれやこれやで

私達作業療法士は、利き手交換を決めるについては必ず悩む。軽いまひなら、交換せずに済ませたいと願う。このように「左利き」の問題を臨床で毎日扱ううちにぶつかったのがこの本である。

著者はイギリスのユーモア作家で、自身左利き、かつイギリス左利き協会の設立者の 1 人である。題名が示すように、少数派である左利きが置かれている様々の問題を、歴史的、文化的、心理的、さまざまな視点から扱っており、これを一般読者向けに書いている。著者自身医学にもリハビリテーションにも関係があるわけではなく、自身の問題として調査研究を進めてきたわけであるが、障害者を「左利き」に仕立てて送り出す立場にある我々にも実に興味深い、参考になる本である。またユーモア作家だけあって文章が面白い。

(産学社, 241 ページ, 850 円)

(都立心身障害者福祉センター, 作業療法士

寺山久美子)